

原 不二夫編

『東南アジア華僑と中国』

——中国帰属意識から

華人意識へ——』

アジア経済研究所 1993年 iii+364ページ

やま した きよ み
山 下 清 海

I

1980年代以降の東南アジアや中国のめざましい経済発展に伴い、最近、新聞、雑誌、テレビなどのマスコミで、華僑・華人についての報道が多くみられるようになってきた。華僑・華人に対する社会的関心の高まりは歓迎すべきことであるが、多くのマスコミ報道の姿勢は、従来からの「華僑」イメージ（すなわち華僑＝商才民族、商売上手）の延長線上にあるように思われる。このような状況の下で、華僑・華人に関する長年の地道な研究の成果が新たに得られたことはたいへん喜ばしい。

華僑のアイデンティティの変遷は、華僑・華人研究の中で非常に重要な問題であるが、それをいかにして把握するかはなかなか難しい課題である。本書は、書名の副題にあるように、東南アジア華僑の「中国帰属意識」から「居住国帰属意識」（華人意識）への変化の過程、すなわち「中国指向」から「居住国指向」への変化の過程を明らかにしようとした共同研究の成果である。

このような研究テーマは、政治的にも民族的にも、きわめてセンシティブ、デリケート（中国語でいう「敏感」）な問題である。とりわけ東南アジアや中国在住の華僑・華人問題の研究者は、今日においてもこの種の研究に取り組む場合、研究対象となる組織や人物、あるいは分析対象の時代などの選定において、きわめて慎重にならざるを得ない状況に置かれている。このような状況に比べると、いわば第三

国的な立場にある日本や欧米に居住する研究者は、研究上の自由度という観点からみればかなり恵まれており、この有利性を大いに活用すべきであろう。この点、本書は東南アジア華僑・華人社会の政治史的側面に積極的に取り組んだ優れた学術書となっている。

II

本書の内容を紹介しながら、評者の若干のコメントを加えていくことにする。本書の構成と担当の執筆者は、以下のとおりである。

序（原不二夫）

第I部 東南アジア華僑の組織的政治・社会活動
と各国政府の対応第1章 フィリピン左派愛国華僑組織の変容
——フィリピン華僑・華人の国家アイデ
ンティティに関する歴史的考察——（廖
赤陽）第2章 バベルキの形成・発展・崩壊——シア
ウ・ギョクチャンの思想と行動を手掛か
りに——（後藤乾一）第3章 ベトナムにおけるフランス植民地支配
衰退期の華僑統治と中国（高田洋子）第4章 胡愈之と南洋華僑——三重の身元をも
った人物の軌跡——（劉冰）

第II部 戦後のマラヤ華僑と中国（原不二夫）

第III部 タイ華僑の政治活動——5・30運動から
日中戦争まで——（村嶋英治）

まず、編者である原は序において、中国と華僑との結びつきは、(1)華僑の中国帰属意識の強さ、(2)中国の国内政治への関与を目的とする組織・活動の存在、(3)中国政府の華僑問題への関与、という3つの要素から成り立っているとし、東南アジア華僑社会の中国派組織について概説している。原は本書に多くの貴重な資料を付表として整理しているが、ここでは東南アジア各国における中共派組織である中国民主同盟支部、および東南アジア各地で開催された

中国関連集会についての表が示されている。

第1部は、フィリピン・インドネシア・ベトナムを対象に、華僑組織とその活動、中国との関係などについて論じたものである。

第1章は研究例が乏しいフィリピンの華僑・華人社会についての論究であり、フィリピン左派（親共）華僑・華人組織の盛衰・変容の歴史を考察している。とくに左派組織が最も活躍し、フィリピン華僑社会が重大な転換に直面した1920年代後期から50年代初頭に重点が置かれている。冒頭においてフィリピン華僑・華人社会の研究史や同社会の基本的特色が要領よくまとめられている。筆者は、「研究史の空白を補うため、本章は歴史の史実の詳述に大量の紙幅を割かざるを得なかった」（32ページ）と断っているが、華僑組織の発展史の詳細な記述は本章の最大の成果といえる。最後に、フィリピン左派愛国華僑組織系統の沿革が付表としてまとめられ、読者の理解を助けている。現地において筆者が実施した関係者に対するインタビューも、論述に説得力を加えている。筆者は、現地の華僑学校の学生に対し生活意識調査も実施しているというが、本章では紙幅の関係で、その成果が十分に活かされていないのが惜しまれる。

第2章は、インドネシア華人社会がナショナリズムの高揚する新興独立国の中で、いかに自らのアイデンティティを模索しようとしたのかについて、対中関係をも念頭に入れつつ考察したものである。ここでは、戦前戦後を通じ、最も高い動員力をもった華人の政治団体といわれるバベルキ（インドネシア国籍住民協議会）の最高指導者シャウ・ギョクチャン（蕭玉燦、1914～81年）の思想と行動に焦点を当て、詳細な分析がなされている。1965年の9月30日事件後、バベルキは左派系組織と刻印され壊滅させられ、またその指導者であるシャウ・ギョクチャンも10年あまりの獄中生活を強いられた。したがって、今日のインドネシアでは、国立図書館のバベルキやシャウ・ギョクチャンについての文献資料は「封印」されたままだという。筆者は、主としてシャウ・ギョクチャンの回想録にもとづいて、彼の活動の軌跡を追っている。彼は回想録の中で、9月30日事

件以後の華人に対する強制的かつ集団的な改姓運動にみられる同化主義を批判し、「自然的統合」を唱えたバベルキの闘争の継承を、続く世代に訴えたという。筆者の本研究の動機づけにもなっているが、東南アジアの多民族国家における華人の国民統合のあり方を考える上で、シャウ・ギョクチャンの思想は、確かに多くの示唆を含んでいると思われる。

わが国における東南アジア華僑・華人研究の中で、ベトナムに関する研究はやや遅れているが、第3章はベトナム華僑と中国との関係を論じた貴重な成果である。第二次世界大戦をはさんで1930年代から40年代末頃のベトナムにおける華僑統治と2つの中国勢力（中国国民党政府と中国共産党）との関係を考察している。この時期は、約80年間にわたって形成されてきたフランスの植民地体制の枠組が崩壊し、独立戦争＝インドシナ戦争へ突入する重要な政治変動期に当たるといえる。これまでほとんど知られていなかった第二次世界大戦直後のベトナムにおける中国民主同盟の工作活動について、当事者の回想録をもとに紹介している点も注目される。ベトナムにおいて「幫」を植民地体制内に行政単位として機構化したフランスの華僑支配は、20世紀初頭に制度的完成をみたが、1930年代半ばからその統治体制は急速に衰退過程をたどった、と筆者は結論づけている。「民族的隔離、人種的差別、経済的利用の微妙なバランスの上に築かれたフランスの華僑統治」（127ページ）に衰退をもたらした外的要因のひとつは、ベトナム華僑社会に対する中国の干渉、支配力拡大の意図であったと論じている。

第4章は、1920年代から80年代にかけて、中国の政治舞台、マスコミ界、文化界で活躍した胡愈之（1896～1986年）をとりあげ、とくに彼が南洋（マラヤ、インドネシア）に滞在した7年あまり（1940年12月～48年3月）の活動を追跡し、当時の華僑社会の状況を明らかにしている。1940年代、胡が南洋に滞在していた時期、彼は3つの身元（中国共産党員、中国民主同盟指導者、華僑）をもち、40年代前半には、南洋華僑の抗日宣伝、文化活動に積極的な役割を果たし、40年代後半にはマラヤ華僑の団結、思想の方向に大きな影響を与えたという。胡がシン

ガポール着任後、華僑社会の幫間の対立を和解させ、華僑の団結の促進に尽力した記述は、当時の華僑社会において幫的結合がいかに強固なものであったかを示しており興味深い。

第II部は、マラヤ華僑と中国との関係、中国帰属意識からマラヤ帰属意識への変化過程に関する研究で、本書の中核をなすものといえる。筆者は、すでに第二次世界大戦後から1960年頃までのマラヤにおいて、華字誌紙、華僑組織を通じて、華僑の中国帰属意識の隆盛と後退、マラヤ帰属意識の台頭と確立についての優れた研究を行なっている^(註1)。本稿では、それらの研究をさらに進めて、華僑全般の中国帰属意識からマラヤ帰属意識の確立過程の解明が試みられている。その具体的方法として、筆者は、(1)中国関連集会(国慶節、双十節など)の状況、(2)華字紙の年号表記、休刊日などの変化(すなわち華字紙のマラヤ化)、(3)領事館の機能の変化、(4)中国政府の華僑政策の推移、という4つの側面を検討している。考察の結果、双十節集会の消滅、華字紙の「祖国」「故国」の中国からマラヤへの転換、華僑学校の教科書のマラヤ化などの時期が、1950年代半ば(57年のマラヤ連邦独立前夜)に集中しており、第二次世界大戦終結直後の強烈な中国帰属意識がわずか10年あまりで大変貌をとげたことを、十分な資料にもとづいて明らかにしている。現地華字紙の膨大な記事の詳細な分析は、本稿の大きな特色となっている。

第III部は、タイの華僑組織の詳細な歴史の変遷を分析している。1920年の5・30運動から41年末の日本軍の東南アジア侵攻直前までの期間において、タイ華僑の中国国民党および共産党を中心とした政治活動が、独立国タイの中でいかに展開されたかを解明している。本稿の冒頭において、スキナー(G. W. Skinner)の有名な著作 *Chinese Society in Thailand: An Analytical History* (Ithaca: Cornell University Press, 1957) は「過大評価」されているとの筆者の鋭い指摘は注目される。本稿では、国民党派の活動と共産党派の活動に分けて考察したあと、タイ政府の華僑弾圧と強制的タイ化政策について論じている。本稿の内容は、本書全体が主に分析の対

象とした第二次世界大戦終結から1960年頃までとは、時期的にずれがあるのが惜まれる。しかし、膨大なタイ外交史料、タイ語および中国語新聞などの詳細な分析、さらに華僑指導者へのインタビューの実施などにもとづいた筆者の論述は、大きな説得力をもっている。本稿で扱われなかった1942年以降のタイ華僑の政治動向に関する研究成果の公刊を楽しみにしたい。

III

以上、本書の内容についてみてきたが、本書は日本の東南アジア華僑・華人研究、とりわけ政治史的分野の研究の発展に大きな貢献をなすものである。

この種の研究では利用可能な資料の制約が大きいが、各論文に引用された文献の豊富さと多彩さをみれば、編者をはじめ各執筆者の研究水準の高さを容易にうかがい知ることができる。ほとんどの論文において、現地発行の華字紙や現地語新聞が資料として重要な地位を占め、詳細な分析がなされている。また、廖論文や村嶋論文で実施されているような現地における当事者からの聞き取り調査などのフィールドワークの重要性については、改めて述べるまでもなからう。インタビューに応じてくれた当事者への十分な配慮は必要であるが、その具体的発言内容を論文の中でもっと多く示し、せっきくの貴重なフィールドワークの成果をより積極的に活かしていく姿勢が重要であろう。

評者のように人文地理学的立場から東南アジア各国の華人社会を調査、研究してきた者にとって^(註2)、華僑・華人の政治史に関する知識の不十分さから、本研究の真の評価を行なうことは容易ではない。しかし、シンガポール、マレーシア、フィリピン、インドネシア、ベトナム、タイにおける華僑から華人へのアイデンティティの変遷とその社会的背景について、多くの新しい知識を本書から得られたことはたいへん貴重なことであった。東南アジア華僑・華人のアイデンティティの問題は、いまの時代においてもきわめて重要である。評者の研究関心からいえば、本書で十分に分析されなかった1960年代以降の

華僑・華人のアイデンティティの変容についても研究を続けていてもらいたいものである。

最近、中国大陸における華僑・華人研究の隆盛はめざましいが、中国大陸の研究者の中には華僑・華人社会の政治史、経済史的側面に強い関心をもつ者が多い。この点、本書の貴重な成果は、中国大陸さらには海外各地の研究者にも大きな影響を及ぼすであろう。

(注1) 原不二夫「戦後マラヤの愛国華僑」(I), (II) (『アジア経済』第27巻第1, 2号 1986年1, 2月) / 同「マラヤにおける中国派華人組織の形成と消滅」(『アジア経済』第31巻第12号 1990年12月)。

(注2) 山下清海『東南アジアのチャイナタウン』古今書院 1987年 / 同『シンガポールの華人社会』大明堂 1988年。

(秋田大学教授)